露肆

泉鏡花作

一

寒く成ると、山の手大通りの露店に古着屋の數が殖える。半纏、股引、腹掛、溝から引揚げたやうなのを、ぐにや／＼と捩ツつ、卷いつ。洋燈も漸と三分心が黒燻りの影に、よぽ／＼した媼さんが、頭からやがて膝の上まで、荒布とも見える襤褸頭巾に包まつて、死んだとも言はず、生きたとも言はず、默つて溝のふちに凍付く。見窄らしげな可哀なのもあれば、常店らしく張出しを三方へ、絹二子の赤大名、鼠の子持縞と云ふ男物の袷羽織。こゝ等は甲斐絹裏を正札附、づらりと竝、べて、正面左右の棚には袖裏の細り赤く見えるのから、淺黄の附紐の附いたのまで、ぎつしりと積上げて、小さな圓髷に結つた、顔の四角な、肩の肥つた、きかぬ氣らしい上さんの、黒天鵝絨の襟卷したのが、同じ色の腕までの手袋を嵌めた手に、細い銀煙管を持ちながら、店が違ひやす、と澄まして講談本を、ト圓心に翳して居て、行

交ふ人の風采を、時々〳〵、水牛緑の眼鏡の上からじろりと視めるのが、意味ありさうで、此の連中には小母御に見えて　ー

湯歸りに蕎麥で極めたが、此節當もなし、と自分の身體を突掛けものにして、そゝつて通る、横町の酒屋の御用聞らしいのなぞは、相撲の取的が仕切つたと云ふ逃尻の、及腰で、件の赤大名の襟を恐る／＼引張りながら、

「阿母。」

などと敬意を表する。

商賣冥利、渡世は出來るもの、商はするもので、五布ばかりの鬱金の風呂敷一枚の店に、襦袢の數々。赤坂だつたら奴の肌脱、四谷ぢや六法を蹈みさうな、けば／＼しい胴、派手な袖。男もので手さへ通せば其處から着て行かれるまでにして、正札が品により、二分から三兩内外まで、膝の周圍にばらりと捌いて、主人はと見れば、上下縞に折目あり。獨鈷入の博多の帶に銀鎖を捲いて、きちんと構へた前垂掛。膝で豆算盤五寸ぐらゐなのを、ぱち／＼と鳴らしながら、

結立ての大圓髷、水の垂りさうな、赤い手柄の、容色も滿更でない女房を引附けて居るのがある。

時節ものので、めりやすの襯衣、めちや／＼の大安賣。ふらんねる切地の見切物、濱から輸出品の羽二重の手巾、棄値段と云ふのもあり。外套、まんと、古洋服、どれも一式の店さへ八九ケ處。續いて多い。古道具屋はあり來りで、近頃古靴を賣る事は・・・・・長靴は烟突の如く、すぽんと突立ち、半靴は叱られた體に畏つて、ごちや／＼と浮世の波に魚の漾ふ風情がある。

兩側は扨て軒を竝べた居附の商人。・・・・・大通りの事で、云ふまでも無く眞中を電車が通る・・・・・

夜店は一列片側に並んで出る。・・・・・夏の内は、西と東を各晩であるが、秋の中ばからは一月置きに成つて、大空の星の沈んだ光と、どす赤い灯の影を競ひつゝ、末は次第に流の淀むやうに薄く疎には成るが、軈て町盡れまで斷えずに續く・・・・・

宵を些と出遅れて、店と店との間へ、脚が極め込みに成る卓子や、箱車を其のまゝ。場所が取れないのに、兩方へ、叩頭をして、

「如何なものでございませうか、飛んだお邪魔に成りませうが。」

「何、お前さん、お互様です。」

「では一ツ御不肖なすつて、」

「えゝ可うございますともね。だが何ですよ。成たけ兩方をゆつくり取るやうにして置かないと、當節は喧しいんだからね。距離を其の八尺宛と云ふお達しでさ、御承知でもございませうがね。」

「ですから尚ほ恐入りますんで、」

「其處にまたお目こぼしがあらうツてもんですよ、まあ、口明をなさいまし。」

「難有う存じます。」

などは毎々の事。

二

此の次第で、露店の間は、何うして八尺が五尺も無い。蒟蒻、蒲鉾、八ツ頭、おでん屋の鍋の中、混雑と込合つて、食物店は、お馴染のぶつ切飴、今川焼、江戸前取り立ての魚焼、と名告を上げると、目の下八寸の鯛焼と銘を打つ。眞似はせずとも可い事を、鱗焼は氣味が惡い。

引續いては兵隊饅頭、鶏卵入の滋養麺麭。・・・・・・かるめら焼のお婆さんは、小さな店に鍋一つ、七つ五つ、孫の數ほど、ちよんぼりと竝べて寂しい。

茶めし餡掛、一品料理。一番高い中空の赤行燈は、牛鍋の看板で、一山三錢二錢に鬻ぐ、蜜柑、林檎の水菓子屋が負けじと立てた高張も、人の目に付く手術であらう。

古靴屋の手に靴は穿かぬが、外套を賣る女の、釦きら／＼と羅紗の筒袖。小間物店の若い娘が、毛絲の手袋嵌めたのも、寒さを凌ぐとは見えないで、廣

告めくのが可憐らしい。

氣取つたのは、一軒、古道具の主人、山高帽。賣つても可いさうな肱掛椅子に反身の頬杖。がらくた壇上に張交ぜの二枚屏風。づんどの銅の花瓶に、からびたコスモスを投込んで、新式な家庭を見せると、鄰の同じ道具屋の亭主は、炬燵櫓に、ちよんと乗つて、胡坐を小さく、風除けに、葛籠を押立て、天窓から、其の尻まで、すつぽりと安置に及んで、秘佛は何うだ、と達磨を極めて、寂寞として定に入る。

「や、此奴ア酒落てら。」

と往來が讃めて行く。

黒い毛氈の上に、明石、珊瑚、トンボの青玉が、こつ／＼と寂びた色で、古い物語を偲ばすもあれば、青毛布の上に、指環、鎖、襟飾、燦爛と光を放つ合成金の、新時代を語るもあり。・・・・・又合成銀と稱へるのを、大阪で發明して銀煙管を並べて賣る。

ーー

「諸君、二圓五十錢ぢや言うたんぢや、可えか、諸君、熊手屋が。露店の賣品の値價にしては、聊か高値ぢや思はるゝぢやらうが、西洋の話ぢや、で、分るぢやらう。二圓五十錢、可えか、諸君。」

と重なり合つた人群集の中に、足許の溝の縁に、馬乘提灯を動き出しさうに据ゑたばかり。店も何も無いのが、額を仰向けにして、大口を開いて喋る・・・・・此の學生風な五ツ紋は商人ではなかつた。

此處等へ顔出しをせねば成らぬ、救世軍とか云へる人物。

「其處でぢや諸君、可えか、其の熊手の値を聞いた海軍の水兵君が言はるゝには、可、熊手屋、二圓五十錢は分つた、しかしながらぢやな、此處に持合はせの錢が五十錢ほか無い。即ち此の五十錢を置いて行く。直ぐに後金の二圓を持つて來るから受取つて置いてくれい。熊手は預けて行くぞ、誰も他のものに賣らんやうになあ、と云はれましたが、諸君。

手附を受取つて物品を預つて置くんぢやからあ、」と俯向いて、唾を吐いて、

「ぢやから諸君、誰にしても異存はあるまい。宜しうございます、行つて入らつしやいと云うて、其の金子を請取つたんぢや、可えか、諸君。處でぢや、約束通りに、あとの二圓を持つて、直ぐに其の熊手を取りに來れば何事もありませんぞ。

そうら、其が遣つて來ん。來んのぢや諸君、一時間經ち、二時間經ち、十二時が過ぎ、半が過ぎ、何うぢや諸君、軈て一時頃まで遣つて來んぞ。

他の露店は皆仕舞うたんぢや。其で無うてから既に露店の許された時間は經適して、僅に巡行の警官が見て見ぬ振と云ふ特別の慈悲を便りに、茫乎と寂しい街路の霧に成つて行くのを視めて、鼻の尖を冷たくして待つて居つたぞ。

處へ、てくり／＼、」

と兩腕を奮んで振つて、づぽん下の脚を上げたり、下げたり。

「向うから遣つて來たものがある、誰ぢやらうか諸君、熊手屋の待つて居る水兵ぢやらうか。其の水兵ならばぢや、何事も別に話は起らんのぢや、諸君。然るに世間と云ふものは爰が話ぢや、今來たのは一名の立派な紳士ぢや、夜會の歸りかとも思はれる、何分か醉うてのう。」

三

「皆さん、申すまでもありませんが、お家で大切なのは火の用心でありまして、其の火の用心と申す中にも、一番危険なのが洋燈であります。何故危い。お話しをするまでもありません、過失つて取落しまする際に、火の消えませんのが、壺の、此の、」

と目通りで、眞鍮の壺をコツ／／と叩く指が、て掌掛けて、油煙で眞黒。

頭髪を長くし、きちんと分けて、額にふら／／と捌いた、女難なきにしもあらずなのが、渡世となれば是非も、無い。

「石油が待てしばしもなく、〓と燃え移るから起るのであります。御覽なさいまし、大阪の大火、青森の大火、御承知でありませう、失火の原因は、皆此の洋燈の墜落から轉動（と妙な對句で）を起します。其の危險な事は、硝子壺も眞鍮壺も決して差別はありません。と申すが、唯今もお話しました通り、火が消えないからであります。其處で、手前

商ひまするのは、ラヂーンと申して、金山鑛山に於きまして金を溶かしまする處の、爐壺にいたしまするのを使つて製造いたしました。口金の保助器は内務省お屆濟みの專賣特許品。御使用の方法は唯今お目に懸けまするが、安全口金、一名火事知らずと申しまして、」

「何だ、何だ。」

と立合ひの肩へ遠慮なく、く脣の厚い、眞赤な顔を、ぬい、と出して、磴と睨んで、醉眼をとろりと据ゑる。

「うむ、火事知らずか、何を！」　と喧嘩腰に力を入れて、もう一息押出しながら、

「燒けたら水を打懸けろい、げい。」

と噫をするかと思ふと、印半纏の肩を聳やかして、のツと行く。新姐子がばら／＼と避けて通す。

唯嶮な目を一寸見据ゑて、

「あゝ云ふ親方が火元に成ります。」　と苦笑。

昔から大道店に、醉拂ひは附いたもので、お職人親方手合の、然うしたのは有觸れたが、長外套に茶の中折、髭の生えた立派なのが居る。

辻に黒山を築いたが、北風の通す、寒い背後から藪を押分けるやうに、杖で背伸びをして、

「踊つとるは誰ぢや、何しとるかい。」

「へい、面白づくに踊つてるぢやござりやせん。唯今、鼻紙で切りました骸骨を踊らせて居りますんで、へい、」

「何ぢや、骸骨が、踊を踊る。」

どた／／と立合の背に凭懸つて、

「手品か、うむ、手品を賣りよるぢやな。」

「へい、八通りばかり認めてござりやす、へい。」

「うむ、八通り、此の通か、はツはツ、」　と變哲もなく酒落のめして、

「何うぢや五厘も投げて遣るか。」

「えゝ、投錢、お手の内は頂きやせん、種あかしの本を賣るのでげす、お求め下さいやし。」

「ふむ・・・・・　投錢は謝絶する、見識ぢやな、

本は幾干だ。」
「五錢、」
「何、」
「へい、お立合にも申して居りやす。へい、えゝ、特の外音聲を痛めて居りやすんで、お聞苦しう、・・・・へい、お極りは五銅の處、御愛嬌に割引をいたしやす、三錢でございやす。」
「高い！」
と喝つて、
「手品屋、負けろ。」
「毛頭、お掛直はございやせん、宜しくばお求め下さいやし、三錢でございやす。」
「一錢にせい、一錢ぢや。」

「あツあ、推量々々。」　と對手に成らず、人の環の底に掠れた聲、地の下にて踊るやう。

「お次は相場の當る法、辨ずるまでもありませんよ。・・・・・我人ともに年中螻では不可ません、一攫千金、お茶の子の朝飯前と云ふ　・・・・・次は、」

細字に認めた行燈をくるりと廻す。綱が禁札、ト捧げた體で、吉原被りの若いもの、別に絣の羽織を着たのが、版本を抱へて行む。

「諸人に好かれる法、嫌はれぬ法も一緒ですな、愛嬌のお守と云ふ條目。無錢で米の買へる法、火なくして暖まる法、飲まずに醉ふ法、歩行かずに道中する法、天に昇る法、色を白くする法、婦の惚れる法。」

四

「お痛え、痛え、」

尾を撮んで、によろりと引立てると、青黒い背筋が畝つて、びくりと鎌首を擡げる機勢に、手術服と云ふ白いのを被つたのが、手を振つて、飛上る。

「えゝ驚いた、蛇が啖付くです　ーー　だが、諸君、こんなことでは無い。・・・・・此の木製の蛇が、僕の手練に依つて、不可思議なる種々の運動を起すです。急がない人は立つて見て行き給へよ。奇々妙々〳〵感心と云ふのだから。

だが、諸君、だがね、僕は手品師では無いのだよ。蛇使ひではないのですが、こんな處ぢや、誰も衞生と云ふ事を心得ん。生命が大切と云ふ事を辨別へて居らん人ばかりだから、其處で木製の蛇の運動を起すのを見て行き給へと云ふんだ。

齒の事なんか言つて聞かしても、何の道分りはせんのだから、無駄だからね、無駄な話だから決して

賣らうとは言はんです。賣らんのだから買はんでも宜しい。見て行給へ。見物をしてお出でなさい。今、運動を起す、一分間にして暴れ出す。

だが諸君、だがね諸君、齒磨にも種々〳〵ある、花王齒磨、ライオン、象印、クラブ、梅香散・・・・・雜と算へた處で五十種以上に及ぶです。だが、諸君、言つたつて無駄だ、何うせ買ひはしまい、僕も賣る氣は無い、こんな處ぢや分るものは無いのだから、賣りやせん、賣りやせんから木製の蛇の活動を見て行き給へ。」

と青い帽子をずぼらに被つて、目をぎろ／＼と光らせながら、憎體な口振で、齒磨を賣る。　二三軒鄰では、人品骨柄、天晴、黒縮緬の羽織でも着せたいのが、悲愴なる聲を揚げて、殆ど歎願に及ぶ。・・・・・

「何うぞ、お試し下さい、ねえ、是非一回御試驗が仰ぎたい。口中に熱あり、齒の浮く御仁、齒齦の弛んだお人、お立合の中に、もしや萬一です。口の

臭い、舌の粘々するお方がありましたら、此處に出して置きます、此の芳口劑で一度漱をして下さい。」

と一口がぶりと遣つて、悵然として仰反るばかりに星を仰ぎ、頭髪を、ふらりと掉つて、ぶく／／と地へ吐き、立直ると胸を張つて、これも白衣の上衣兜から、綺麗なを手巾一出して、口のまはりを拭いて、と恍惚とする。

「爽かに清き事、」

と黄色い更紗の卓子掛を、しなやかな指で彈いて、

「何とも譬へやうがありません。唯一分間、一口含みまして、二三度、口中を漱ぎますと、齒磨楊枝を持ちまして、ものの三十分使ひまするより、遙かに快く成るのであります。口中には限りません。精神の清く爽かに成りますに從うて、頭痛なども立處に治ります。何うぞ、お試し下さい、口は禍の門、諸病は口からと申すではありませんか、齒は大事にして下さい、口は綺麗にして下さいまし、ねえ、私が願ひます、何うぞ諸君。」

「此の砥石が一挺ありましたらあ、今までのように、

盥ぢやあ、湯水ぢやあとウ、騒ぐにはア及びませぬウ、お座敷のウ眞中でもウ、お机、卓子臺の上エでなりとウ、唯、こいに遣つて、すうい／＼と擦りますウばかりイイイ。菜切庖丁、刺身庖丁ウ、向ウへ向ウへとウ、十一二度、十二三度、裏を返しまして、黒い色のウ細い砥ウ持イましてエ、柔かう、すいと一二度ウ、二三度ウ、撫るウ撫るウばかりイ、此のウ菜切庖丁が、面白いやうにイ切まあすウる、切れまあすウる。こいに、さツくり／＼横紙が切れますやうなら、當分のウ内イ、誰方様のウお邸でもウ、切ものに御不自由はございませぬウ。此のウ細い方一挺がア、定價は五錢のウ處ウ、特別のウ割引イでエ、粗のと二ツ一緒に、名倉の缺を添へまして、三錢、三錢でエ差上げますウ、剪刀、剃刀磨にイ、一度ウ磨がせましても、二錢とウ三錢とは右から左イ・・・・・」

と寨の目に切つた紙片を、膝にも敷物にもばら／＼と夜風に散らして、縞の筒袖凛々しいのを衝と張つて、菜切庖丁に金剛砂の花骨牌ほどな砥を當てながら、餘り仰向いては人を見ぬ、包ましやかな毛絲

の襟巻。頬の細いも人柄で、大道店の息子株。

押竝んで、めくら縞の襟の剥げた、袖に横撫のあとの光る、同じ紺のだふ／＼とした前垂を首から下げて、千草色の半股引、膝のよぢれたのを捻つて穿いて、ずんぐりむつくりと肥つたのが、日和下駄で突立つた、いけずな悴が、三徳用大根皮剥、と言ふのを喚く。

五

其の鯉口の兩肱を突張り、手尖を八ツ口へ突込んで、頸を、襟へ、もぞ／＼と擦附けながら、

「小母さん、買つてくんねえ、小父的買ひねえな。千六本に、おなますに、皮剥と一緒に出來らあ。内が製造元だから安いんだぜ。大小あらあ。大が五錢で小が三錢だ。皮剥一ツ買つたつてお前、三錢はするぜ、買つとくんねえ、あ、あ、あ、」

と引捻れた四角な口を、額まで濶と開けて、猪首を附元まで窘める、と見ると、仰状に大欠伸。餘り度外れなのに、自分から吃驚して、

「はつ、」と、突掛る八ツ口の手を引張出して、握拳で口の端をポン、と蓋をする、と、ほつと眞白な息を大きく吹出す　・・・・・

いや、順に並んだ、立つたり居たり、凸凹とした何の店も、同じやうに息が白い。むら／＼と沈んだ、燻つた、其の癖、師走空に澄透つて、蒼白い陰氣な灯の前を、ちらり／＼と冷たい魂が徘徊ふ姿で、耄

碌頭巾の皺から、押立てた古服の襟許から、汚れた襟卷の襞〓の中から、朦朧と顯れて、揺れる火影に入亂れる處を、ブン／＼と唸つて來て、大路の電車が風を立てつゝ、颯と引攫つて、チリ／＼と紫に光つて消える。

と何の顔も白茶けた、影の薄い、衣服前垂の汚目ばかり火影に目立つて、煤びた羅漢の、トボンとした、寂しい、濁つた形が溝端にばら／＼と殘る。

こんな時は、時々ばつたりと往來が途絶えて、其の時々、對向つた居附の店の電燈瓦斯の晃々とした中に、小僧の形や、帳場の主人、火鉢の前の女房などが、繪草子の裏、硝子の中、中でも鮮麗なのは、軒に飾つた紅入友染の影に、くつきりと顯れる。

露店は茫として霧に沈む。

忽ち、ふら／＼と黒い影が往來へ湧いて出る。其の姿が、毛氈の赤い色、毛布の青い色、風呂敷の黄色いの、寂しい媼さんの鼠色まで、フト判然と凄い星の下に、漆のやうな夜の中に、淡い彩して顯れると、

商人連はワヤ／＼と動き出して、牛鍋の唐紅も、飜然と揺ぎ、おでん屋の屋臺も、くわツと氣競が出て、白氣濃やかに狼煙を揚げる。翼の鈍い、大きな蝙蝠のやうに地摺に飛んで所を定めぬ、煎豆屋の荷に、絲のやうな火花が走つて、

「豆や、煎豆、煎立豆や、柔い豆や。」

と高らかに冴えて、思ひもつかぬ遠くの辻のあたりに聞える。

又一時、がや／＼と口上ぶが彼方此方にはじまるのである。

が、次第に引潮が早く成つて、　ー　漸つと柵にかゝつた海草のやうに、土方の手に引摺られた古股引を、はづすまじとて、媼さんが曲つた腰をむず／＼と動かして、溝の上へ膝を摺出す、其の効なく・・・・・博多の帶を引掴みながら、素見を追懸けた亭主が、値が出來ないで舌打をして引返す。・・・・・煙草入に引懸つたゞぼ鯊を、鳥の毛の采配で釣らうと構へて、ストンと外した玉屋の爺様が、餌箱を檢べる體に、財布を覗いて鬱ぎ込む、齒磨屋の卓子の上に、お試用に掬出した粉が白く散

つて、賣るものゝ鰌髯にも薄り霜を置く　ーー　初夜過ぎに成ると、其の一時々々／＼、大道店の灯筋を、霧で押伏せらるゝ間が次第に間近に成つて、盛返す景氣が其の毎に、遲く重つくるしく成つて來る。

づらりと見渡した皆が悄乎する。

勿論、電燈の前、瓦斯の背後のも、寢る前の起居が忙しい。

分けても、眞白な油紙の上へ、見た目も寒い、千六本を心太のやうに引散らして、ずぶ濡の露が、途切れ／＼にぽた／＼と足を打つて、溝縁に凍ついた大根剥の悴が、今度は堪らなさうに、凍んだ兩手をぶる／＼と脣へ押當てゝ、貧乏搖ぎを忙しくしながら、

「あ、あゝ」

と又大欠伸をして、むら／＼と白い息が吹出すと、筒抜けた大聲で、

「大福が食ひてえなッ。」

六

「大福餅が食べたいとさ、は、は、は、」

と直き其の傍に店を出した、二分心の下で手許暗く、小楊枝を削つて居た、人柄なだけ、可憐いらしい女隱居が、黒い頭巾の中から、鄰を振向いて、掠れ／＼笑つて言ふ。

其の鄰の露店は、京染正紺請合とある足袋の裏を白く飜して、ほし／＼と竝べた三十ぐらゐの女房で、中が一寸隔つただけ、三徳用の言つた事が大道でぼやけて分らず　・・・・・　但し吃驚するほどの大音であつたので、耳を立てゝ聞合はせたものであつた。

會得が行くと然も無い事だけ、をかしく成つたものらしい。

「大福を　・・・・・　ほゝゝ、」と笑ふ。

と其の鄰が古本屋で、行火の上へ、髯の伸びた痩せた頤を乗せて、平たく蹲つた病人らしい陰氣な男

が、釣込まれたやら、

「ふゝゝ、」

と寂しく笑ふ。

續いたのが、例の高張を揚げた威勢の可い、水菓子屋、向顱巻の結び目を、山から飛んで來た、と押立てたのが、仰向けに反を打つて、呵々と笑出す。次へ、それから、引續いて　ー一　一品料理の天幕張の中などは、居合はせた、客交じりに、わは／＼と笑を揺る。年内の御重寶九星賣が、恵方の方へ突伏して、けた／＼と堪らなさうに噴飯したれば、苦蟲と呼ばれた齒磨屋が、うンふンと鼻で笑ふ。聲が一緒で、同音に、もぐらもちが昇天しようと、水道の鐵管を躍抜けさうな響きで、片側一條、夜が鳴つて、哄と云ふ。時ならぬに、木の葉が散つて、霧の海に不知火と見える灯の間を白く飛ぶ。

なごりに煎豆屋が、くわツと笑ふ、と遠くで凄まじく犬が吠えた。

軒の邊を通魔がしたのであらう。

北へも響いて、町外の方へ、ワツと抜けた。

時にけ頬笑みさへ、口許に莞爾ともしない艶なのが、露店を守つて一人居た。

縦通から横通りへ、電車の交叉點を、其の町外れの方へ下ると、人も店も、灯の影も薄く齒の抜けたやうな、間々〳〵冷い風が渡る癖に、店を一ツ一ツ一重ながら、茫と渦を卷いたやうな霧で包む。同じ燻ぶつた洋燈も、人の目鼻立ち、眉も、青、赤、鼠色の地の敷物ながら、宛然鷄卵のなかのやうに、渾沌として、ふうはり街燈の薄い影に映る。が、枯れた柳の細い枝は、幹に行燈を點けられたより、却つて此の中に、處々〳〵すつきりと、星に蒼く、風に白い。

其の根に、莫蓙を一枚の店に坐つたのが、件の婦で。

年紀は六七・・・・・三十に先づ近い。姿も顔も窶れたから、些と老けて見えるのであらうも知れぬ。綿らしいが、銘仙縞の羽織を、なよ／＼とある肩に細く着て、同じ縞物の膝を薄く、無地ほどに細い縞の、これだけはお召らしいが、透切れのした前垂を〆めて、晝夜帶の胸ばかり、淺黄の鹿子の下じめな

りに、乳の下あたり膨りとしたのは、鼻紙も財布も一緒に突込んだものらしい。

雑と一昔は風情だつた、肩掛と云ふのを四つばかりに疊んで敷いた。其を、褄は深いほど、玉は冷たさうな膝の上へ掛けたら、と思ふが、察するに上へは出せぬ寸斷〳〵の繼らしい。火鉢も無ければ、行火もなしに、霜の素膚は堪へられまい。

黒繻子の襟も白く透く。

抽氣も無く擦切るばかりの夜嵐にばさついたが、艶のある薄手な丸髷がツくりと、焦茶色の絹のふらしてんの襟卷、房の切れた、男物らしいのを細く卷いたが、左の袖口を、ト乳の上へ悄乎と捲き込んだ袂の下に、利休形の煙草入の、裏の緋鹽瀬ばかりが色めく、が其も褪せた。

生際の曇つた影が、瞼へ映して、面長なが、然して瘠せても見えぬ。鼻筋のすつと通つたを、横に掠めて後毛をさらりと掛けつゝ、ものう氣に拂ひもせず。・・・・・切の長い、睫の濃いのを伏目に成つ

て、上氣(じやうき)して乾(かわ)くらしい脣(くちびる)に、吹矢(ふきや)の筒(つゝ)を、一寸含(ちよいとふく)んで、片手(かたて)で持添(もちそ)へた雪(ゆき)のやうな肱(ひぢ)を搦(から)む唐縮緬(たうちりめん)の筒袖(つゝそで)のへりを取(と)つた、繼合(つぎあ)はせものゝ其(そ)の、緋鹿子(ひがのこ)の媚(なまめ)かしさ。

七

三枚ばかり附木の表へ　（一くみ）　も假名で書き、　（二せん）　も假名で記して、前に竝べて、きざ柿の熟したのが、こつ／＼と揃つたやうな、昔は螺が尼になる、これは紅茸の悟を開いて、ころりと參つた張子の達磨。

目ばかり黒い、けば／＼しく眞赤な禪入を、木兎引の木兎、で三寸ばかりの天目臺、すく／＼とある上へ、大は小兒の握拳、小さいのは團栗ぐらゐな處まで、ずらりと乘せたのを、其の俯目に、ト狙ひながら、件の吹矢筒で、フツ。

カタリと言つて、發奮もなく引くりかへつて、輕く轉がる。其の次のをフツ、カタリと飜る。續いてフツ、カタリと下へ。フツ／＼、カタ／＼カタと毛を吹くばかりの呼吸づかひに連れて、五つ七つ立處に、バツ／＼と石鹸玉が消えるやうに、上手にでんぐり、くるりと落ちる。

落ちると、片端から一ツ／＼順々に又竝べて、初手からフツ、と吹いて、カタリと言はせる。・・・・・同じ事を、絶えず休まずに繰返して、此の玩弄物を賣るのであるが、玉章もなし口上もなしで、ツンとしたやうに默つて居るので。

霧の中に笑の虹が、〓と渡つた時も、獨り莞爾ともせず、傍目も觸らず、同じやうにフツと吹く。

カタリと轉がる。

「大福、大福、大福かい。」

と些と粘つて訛のある、キリ／＼と勘走つた高い聲で、龜裂を入らせるやうに霧の中をちよこ／＼走りで、玩弄物屋の婦の背後へ、ぬつと、鼠の中折を目深に、領首を覗いて、橙色の背廣を着、小造りなのが立つたと思ふと、

「大福餅、暖い！」

又甲走つた聲の下、一寸と蹲む、と疾い事、筒服の膝をとんと揃へて、横から當つて、婦の前垂に附着くや否や、兩方の衣兜へ兩手を突込んで、四角い

肩して、一ふり、ぐいと首を振ると、びんと反らした鼻の下の髭とゝもに、砂除けの素通し、ちよんぼりした可愛い目をくるりと遣つたが、ひよんな顔。

・・・・・と云ふものは、其の、

「・・・・・・暖い！・・・・・・」を機會に、行火の箱火鉢の蒲團の下へ、潜込ましたと早合點の膝小僧が、すぽりと氣が抜けて、二ツ、ちよこなんと揃つて、灯に照れたからである。

橙背廣の此の紳士は、通り掛りの一杯機嫌の素見客でも何でもない。冷かし數の子の數には漏れず、格子から降ると言ふ長い煙管に縁のある、煙草の脂留、新發明螺旋仕懸ニツケル製の、卷莨の吸口を賣る、氣輕な人物。

自から稱して技師と言ふ。

で、衆を立たせて、使用法を辨ずる時は、こんな輕々しい態度のものではない。

下目づかひに、晃々と眼鏡を光らせ、額で睨んで、

帽子を目深に、然も歴々が忍びの體。冷々然として落着き澄まして、咳さへ高うはせず、其のニコチンの害を説いて、一吸の卷莨から生ずる多量の沈澱物を以て混濁した、恐るべき液體をアセチリンの蒼光に翳して、屹と試驗管を示す時の如きは、何某の教授が理化學の講座へ立揚つた如く、風采四邊を拂ふ。

其處で、公衆は、唯僅に硝子の管へ煙草を吹込んで、びく／＼と遣ると水が濁るばかりだけれども、技師の態度と、其の口上の、はき／＼とするのに、ニコチンの毒の恐るべきを知つて、戰慄に及んで、五割引が盛に賣れる。

なか／＼何うして、齒科散が試驗藥を用ゐて、立合の口中黄色い齒から拭取つた口鹽から、立處に、黴菌を躍らして見せる處の比ではない。

よく賣れるから、益々得意で、澄まし返つて説明する。

が、夜が稍深く、人影の薄く成つた恁うした時が、

這箇技師大得意の節で。今まで嚔を堪へたやうに、むず／＼と身震ひを一つすると、固く成つて居た卓子の前から、早くもがらりと體を碎いて、飛上るやうに衝と腰を輕く、突然ひよいと鄰のおでん屋へ入つて、煮込を一串引攫ふ。

此奴を、フツ／＼と吹きながら、すぺりと古道具屋の天窓を撫でる、と思ふと、次へ飛んで、あの涅槃に入つたやうな、風除葛籠をぐら／＼搖ぶる。

八

爾時きやつ／＼と高笑、靴をばか／＼と傍へ外れて、何の店と見當を着けるでも無く、脊を屈めて蹲つた婆さんの背後へ一寸踞んで、

「寒いですね。」

と聲を掛けて、トン／＼と肩を叩いて遣つたもので。

「きやつ／＼、」と又笑うて、横歩行きにすら／＼、で、居合はす、古女房の背をドンと啖はす。突然、年増の行火の中へ、諸膝を突込んで、けろりとして、娑婆を見物、と云ふ澄ました顔で、當つて居る。

露店中の愛嬌もので、總籬の柳縹さん。

即ち又、其の傳で、大福暖いと、向う見ずに遣つた處、手遊屋の婦は、腰のまはりに火の氣が無いので、膝が露出しに大道へ、莫蓙の薄霜に間拍子も無く竝んだのである。

橙色の柳縹子、氣の抜けた肩を窄めて、ト一つ、大きな達磨を眼鏡でぎらり。　婦は澄ましてフツと吹く・・・・・カタリ　・・・・・

はツと頤を引く間も無く、カタ／＼／＼と殘らず落ちると、直ぐに、其のへりの赤い筒袖の細い雪で、一ツ一ツ拾つて並べる。

「堪らんですね、寒いですな、」

と髯を捻つた。が、大きに照れた風が見える。

斜違に之を視めて、前齒の金をニヤ／＼と笑つたのは、總髪の大きな頭に、黒の中山高を堅く嵌めた、色の赤い、額に畝々と筋のある、頬骨の高い、大顔の役人風。迫つた太い眉に、大い目金で、胡麻鹽髯を貯へた、頤の尖つた、背のづんぐりと高いのが、絣の綿入羽織を長く着て、霜降のめりやすを太く着込んだ巖丈な腕を、客商賣とて袖口へ引込めた、其の手に一條の竹の鞭を取つて、バタ／＼と叩いて、三州は岡崎、備後は尾の道、肥後は熊本の刻煙草を指示す　・・・・・

「内務省は煙草専賣局、印紙御貼用濟。味は至極可えで、喫んで見た上で買ひなさい。大阪は安井銀行、第三藏庫の擔保品。此度、同銀行藏掃除に就いて拂下げに相成つたを、當商會に於て一手販賣をする、抵當流れの安價な煙草ぢや。喫んで芳う、香味、口中に遍うして而して其の聊も脂が無い。私は疾持ぢやが、」

と空咳を三ツばかり、小さくして、竹の鞭を袖へ引込め、

「此の煙草を用ゐてから、頓と惱みを忘れた。がぢや、荒くとも脂がありとも、唯強いのを望むと言ふ人には決して此の煙草は向かぬぞ。香味あつて脂が無い、抵當流れの刻は何うぢや。」

と太い聲して、些と充血した大きな瞳をぎよろりと遣る。其の風采、高利を借りた覺えがあると、天窓から水を浴びさうなが、思ひの外、温厚な柔和な君子で。

店の透いた時は、其處等の小兒をつかまへて、

「あ、然ぢやでの、」　などと役人口調で、目金

の下に、一杯の皺を寄せて、髯の上を撫で下げ／＼滑稽けた話をして喜ばせる。其の小父さんが、

「いや、若いもの。」

と言ふ顔色で、竹の鞭を、ト笏に取つて、尖を握つて捻向きながら、帽子の下に暗い額で、髯の白いに、金が顯な北叟笑。

附穂なさに振返つた技師は、これを知つて尚ほ照れた。

「今に御覽じろ。」

と遠灯の目ばたきをしながら、揃へた膝をむく／＼と揺つて、

「何て、寒いでせう、おゝ寒い。」

と金切聲を出して、ぐたりと左の肩へ寄凭る、・・・・・體の重量が、他愛ない、暖簾の相撲で、ふはりと外れて、ぐたりと膝の崩れる時、ぶる／＼と震へて、堅く成つたも道理こそ、半纏の上から觸つても知れた。

げつそり懐手をして一寸も出さない、すらりと下

つた左の、其の袖は、何も支へぬ。　ーー　婦は片手が無いのであつた。

九

最う此の時分には、其方此方で、徐々〳〵店を片附けはじめる。まだ九時些と廻つたばかりだけれども師走の宵は、夏の頃の十二時過ぎより歸途を急ぐ。

で、處々〳〵、張出しが除れる、傘が窄まる、其の上に冷い星が光を放つて、ふつ／／と洋燈が消える。突張りの白木の柱が、すく／／と夜風に細つて、積んだ棚が、がた／／崩れる。其の中へ、炬燵が化けて歩行き出した體に、むつくりと、大きな風呂敷包を背負つた形が糶上る。消え殘つた灯の前に、霜に燒けた脚が赤く見える。

中には荷車が迎に來る、自轉車を引出すのもある。年寄には孫、女房には其の亭主が、何の店にも一人二人、人數が殖えるのは、より／／に家から片附けに來る手傳と、・・・・・其ればかりでは無い。思ひ／／に氣の合つたのが、歸際の世間話、景氣の沙汰が主なるもので、

「相變らず不可ますまい、然う言つちや失禮ですが。」

「否、思つたより、昨夜よりは些と増ですよ。」

「又私どもと來た日にや、お話に成りません。」
「御多分には漏れませんな。」
「最う休まうかと思ひますがね、其でも出つけますとね、一晩でも何だか皆さんの顔を見ないぢや氣寂しくつて寢られません。・・・・・無駄と知りながら出て來ます、へい、油費でさ。」

と一處に團まるから、何の店も敷物の色ばかりで、枯野に乾した襁褓の光景、七星の天暗くして、幹枝盤上に霜深し。

まだ突立つたまゝで、誰も人の立たぬ店の寂しい灯先に、長煙管を、ト横に取つて細いぼろ切れを引掛けて、のろ／＼と取つたり、脂通しの針線に黒く畝つて搦むのが、恁る折から、齒磨屋の木蛇の運動より凄いのであつた。

時に、手遊屋の冷かに艶なのは、
「寒い。」　と技師が寄凭つて、片手の無いのに悚然としたらしい、其の途端に、吹矢筒を密を置いて、唯其だけ使ふ、右の手を、すつと内懷へ入れる

と、繻子の帶がきりゝと動いた。其のまゝ、茄子の挫げたやうな、褪せたが、紫色の小さな懷爐を取つて、默つて衝と技師の胸に差出したのである。

寒くば貸さう、と言ふのであらう。　・・・・・

擧動の唐突な其の上に、又ちらりと見た、緋鹿子の筒袖の細いへりが、無い方の腕の切口に、べとりと血が染んだ時の状を目前に浮べて、ぎよつとした。

何うやら、片手無い、其の切口が、茶袋の口を絲でしめたやうに想はれるのである。

「其には及ばんですよ、えゝ、・・・・・御新姐」　と面啖つて我知らず口走つて、ニコチンの毒を説く時のやうな眞面目な態度に成つて、衣兜に手を突込んで、肩をもそ／＼と揺つて、筒服の膝を不状に膨らましたなりで、のそりと立上つたが、忽キヤ／＼とした聲を出した。

「嫁娶々々！」

長提灯の新しい影で、すつすと、眞新しい足袋を照らして、紺地へ朱で、日の出を染めた、印半纏の

揃衣を着たのが二十四五人、前途に松原があるやうに、背の其の日の出を揃へて、線路際を靜に練るこ

・・・・・・

結構さうなお爺さんの黒紋着、意地の惡さうな婆さんの黄色い襟も交つたが、男女合はせて十四五人、いづれも俥で、星も晴々〳〵と母衣を刎ねた、中に一臺の母衣を懸けたのが當の夜の縁女であらう。

黒小袖の肩を圓く、但し引緊めるばかり兩袖で胸を抱いた、眞白な襟を長く、のめるやうに俯向いて、今時は珍らしい、朱鷺色の角隠に花笄、櫛ばかりでも頭は重さう。ちらりと紅の透る、白襟を襲ねた端に、一筋キラ／＼と時計の黄金鎖が輝いた。

上が身を堅く花嫁の重いほど、乘せた車夫は始末の成らぬ容體なり。妙な處へ楫を極めて、曳据ゑるのが、がくりと成つて、ぐる／＼と磨骨の波を打つ。

十

露店の目は、言合はせたやうに、きよと／＼と夢に辿る、此の桃の下路を行くやうな行列に集まつた。

婦も一寸振向いて、（大道商人は、いづれも、電車を背後にして居る）　蓬莱を額に飾つた、其の石のやうな姿を見たが、衝と向をかへて、其處へ出した懐爐に手を觸つて、上手に、片手でカチンと開けて、熟と俯向いて、灰を吹きつゝ、

「無駄だねえ。」

と清い聲、冷かなものであつた。

「弘法大帥御夢想のお灸であすソ、利きますソ。」

と寝惚けたやうに言ふと齊しく、此も嫁入を恍惚視めて、恰も其の前に立合はせた、つい居廻りで湯歸りらしい、島田の亂れた、濡手拭を下げた娘の裾へ、矢庭に一束の線香を押着けたのは、あるが中にも、幻のやうな坊様で。

つくねんとして、一人の影法帥のやうに、びよろ

りとした黒紬の間伸びた被布を着て、白髪の毛入道に、ぐたりとした眞綿の帽子。扁平く、薄く、然も大ぶりな耳へ垂らして、環珠數を掛けた、鼻の長い、頤のこけた、小鼻と目が窪んで、飛出した形の八の字眉。大きな口の下脣を反らして、かツくりと抜衣紋。長々と力なげに手を伸ばして、かじかんだ膝を抱へて居たのが、フト思出した途端に、居合はせた娘の姿を、男とも女とも辨別へる隙なく、馴れてぐんなりと手の伸びるまゝに、細々と煙の立つ、其の線香を押着けたものであらう。

此の坊様は、人さへ見ると、向脛なり踵なり、肩なり背なり、燻ばつた鼻紙を當てゝ、其の上から線香を押當てながら、

「おだゞ、おだゞ、だゞだぶだぶ、」　と、齒の無い口でむぐ／＼と唱へて、

「それ、利くであしよ、此處で點ゑるは施行ぢやいの。艾入らずであす。熱うもあすまいがの。それ利くであしよ。利いたりや、利いたら、しよな／＼と消して置いて、又使ふであすソ。それ利くであしよ。」　と嘗め廻す體に、足許なんぞ、じろ／＼と

見て商ふ。高野山秘法の名灸。

矢庭に長い手を伸ばされて、はつと後しぎりをする、娘の駒下駄、靴やら、冷飯やら、つい目が疎いかして見分けも無い、退く端の褄を、ぐいと引いて、

「御夢想のお灸であすソ、施行ぢやいの。」と鯰が這ふやうに黒被布の背を乗出して、じり／＼と灸を押着けたもの、堪らうか。

「あれえ、」と叫んで、ついと退く、ト脛が白く、横町の暗に消えた。

坊様、眉も綿頭巾も、一緒くたに天を仰いで、長い顔で、きよとんとした。

「や、聊かお灸でしたね、きやッ、きやッ、」

と笑うて、技師は此を機會に、殷鑑遠からず、と少しく窘んで、浮足の靴ポカポカ、ばら／＼。と亂れた露店の、暗い方を。　　・・・・・

さて此處に、膃肭臍を鬻ぐ一漢子！

板の如くに硬い、黒の筒袖の長外套を、痩せた身

體に、爪尖まで引掛けて、耳のあたりに襟を立てた。帽子は被らず、頭髪を蓬々と抓棄てたが、目鼻立の凜々しい、頬は窶れたが、屈強な壮佼。

澁色の逞しき手に、赤錆ついた大出刃を不器用に引握つて、裸體の婦の胴中を切放して燻したやうな、赤肉と黒の皮と、寸々に、血筋を滕つた中に、骨の薄く見える、やがて一抱もあらう・・・・・頭と尾ごと、丸漬にした膃肭臍を三頭。縦に、横に、仰向けに、胴油紙の上に乗せた。

正面の肋のあたりを、庖丁の背でびた／＼と叩いて、

「世間ではですわ、めつとせいはあるが、膃肭臍は無い、と言うたりするものがあるですが、めつとせいにも膃肭臍にも、眞個のもんは少いですが。」

無骨な口で、

「船に乗つとるもんでさへが・・・・・現在、膃肭臍を漁つた處で、其が膃肭臍、めつとせいと言ふ區別は着かんもんで、世間で云ふめつとせいと言ふ

から雌でせう、勿論、雌もあれば、雄もあるですが。

孰が雌だか、雄だか、黒人にも分らんで、唯此の前歯を、」

と言つて推重なつた中から、ぐいと、犬の顔のやうで眞黒なのを擡げると、陰干の臭が芬として、内へ反つた、しやくんだやうな、霜柱の如き長い歯を、あぐりと剥く。

「此の前歯の處ウを、上下噛合はせて、一寸の隙も無いのウを、雄や、（と言ふのが北國邊のものらしい）と言ふですが、一分一寸ですから、開いて居ても、塞いで居ても分らんのうです。

私は辨舌は拙いですけれども、腦朔臍は確です。腦朔臍と云ふものは、矢鱈むたらにあるものではない。東京府下にも何十人賣るものがあるかは知らんですがね、矢鱈むたらあるもんか。」

と、何か然も不平に堪へず、向腹を立てたやうに言ひながら、大出刃の尖で、纖維を掬つて、一角の如く、薄くねつとりと肉を剥がすのが、・・・・・

遠洋漁業會杜、と記した、まだ油の新しい、黄色い長提灯の影にひく／＼と動く。

其の紫がかつた黒いのを、若々しい口を尖らし、むしや／＼と噛んで、

「二頭がのは賣つて了うたですが、まだ一頭、腦味噌もあるですが、腦味噌は腦病に利くンのですが、膃肭臍の效能は、誰でも知つて居る事で言ふがものはない。

疑はずにお買ひ下さい。まだ確な證據と言うたら、後脚の爪ですが。」

ト大様に視めて、出刃を逆手に、面倒臭い、一度に間に合はせう、と狙つて、ずるりと後脚を擡げる、藻掻いた形の、水掻の中に、空を掴んだ爪がある。

霜風は蝋燭をはた／＼と揺る、遠洋と書いた其の目標から、朦々と洋の氣が虚空に被さる。

里心が着くかして、寂しく二人ばかり立つた客が、あとしぎりに成つて・・・・・やがて、はら／＼と

急いで散つた。

出刃を落した時、赫と顔の色に赤味を帶びて、眞鍮の鉈豆煙管の、眞中を無手と握つて、絲切齒で噛むが如く、引銜へて、

「うむ、」

と、何故か呻る。

處へ、ふは／＼と橙色が露はれた。脂留の例の技師で。

「何うですか、腦脉臍屋さん。」

「いや、」

と唯言つたばかり、不愛想。

技師は親しげに擦寄つて、

「昨夜は、飛んだ事でしたな・・・・・」

「お話に成りません。」

「一體何の事ですか、」

「何や云うて、彼や言うて、まるでお話しに成らんのですが。誰が何を見違へたやら、突然しらべに來て、腦脉臍の中を捜すんですぞ、眞白な女の片腕があると言うて。」・・・・・

【完】